

# 授業での規範逸脱行動における自分および周囲の他者が持つ規範意識の影響に関する縦断的研究

出口拓彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育臨床心理学))

Effects of Students' Own and Their Neighbors' Normative Consciousness on Rule-breaking Behaviors during Lectures  
-A Longitudinal Study-

Takuhiko DEGUCHI

(Department of School Education, Nara University of Education)

**要旨:** 授業における規範逸脱行動の規定因について、自分および他者の規範意識等に注目しつつ縦断的に検討した。大学生を対象に質問紙調査を実施し、自分および他者の規範意識と逸脱頻度、行動基準、適応感等を測定した。10月には240名分、12月には10月の回答者との対照が可能な123名分の有効回答を得た。分析の結果、自分の規範意識や行動基準、他者の逸脱頻度が、自分の逸脱頻度を規定している可能性が示された。ただし、10月における他者の逸脱頻度と12月における逸脱頻度との関連は限定的なものであった。また、他者の規範意識(「推測」「実際」双方)には顕著な影響は見られなかった。さらに、自分の逸脱頻度は、「学業に対する適応感」には負、「対人関係に対する適応感」には正の影響を及ぼすことが示唆された。一方、他者の逸脱頻度は、10月と12月の「学業に対する適応感」にのみ弱い負の関連が示され、徐々に否定的な影響を及ぼす可能性が考えられた。

**キーワード:** 規範逸脱行動 Rule-breaking behavior  
規範意識 Normative consciousness  
大学生 Undergraduate students

## 1. はじめに

「授業中の私語」、(いわゆる)「内職」など、教育の場での規範逸脱行動を扱った研究については、国内外において様々なものがなされている(e.g. Demanet, Vanderwegen, Vermeersch, & Van Houtte, 2013; Durmuscelebi, 2010; 北折・太田, 2011; Özben, 2010; Solomon & Kendall, 1975; 卜部・佐々木, 1999)。中でも「授業中の私語」は、我が国においては小学校だけでなく、中学校から四年制大学に至るまで、多様な校種を対象として研究されており(e.g. 安藤・中島・鄭・中嶋, 2013; 出口, 印刷中; 出口・吉田, 2005; 北折・太田, 2011; 鈴木・戸塚・澤田・椎野, 2015)、規範意識に着目した研究も少なくない(e.g. 出口, 2009; 加藤・太田, 2016; 松本, 2010; 澤田・戸塚・鈴木・椎野, 2013; 鈴木・戸塚・澤田・椎野, 2015)。また、小学校における児童関連の「困難な事項」(例えば、暴言や暴力、悪ふざけやいたずら)について扱って研究(安藤他, 2013)では、「授業中の私語」は最も多く経験され、教師に対するストレス強度も最も高かったことが示されている。また、「授業中の私語」は、多くの者は否定的にとらえている(「してはいけない」と考えている)ことが、従来から報告されている(e.g. 卜部・佐々木, 1999)。すなわち、多くの者

が高い規範意識を有していることが示唆されている。にもかかわらず、現実の教育場面においては授業中の私語が数多く発生している(Durmuscelebi, 2010; Özben, 2010)。

これに関して、公共場面における規範逸脱行動(ゴミのポイ捨て)を題材として、周囲にいる他者による行動の影響に着目した研究がある(e.g. Cialdini et al., 1990; Reno et al., 1993)。これらの研究では、「(周囲にいる)多くの人々がしている行動」(Cialdini et al., 1990)が「規範」として働きうる(「記述的規範」と呼ばれる)ことを示唆している。そして、中学生を対象に授業中の私語について検討した研究(出口, 2018)では、自分の規範意識だけでなく、自分の隣に座っている生徒が私語をすることも、自分自身の私語の頻度を左右しうることを示している。さらに、授業中の私語については、規範逸脱行動に対して自分が持つ態度よりも、他者や学級集団が持つ規範(意識)の方が寛容的なものであると認識される傾向が報告されている(加藤・太田, 2016; 卜部・佐々木, 1999)。そして、自分の態度(「私的見解」)よりも、むしろ学級集団の規範に沿って規範逸脱行動をしている可能性が示唆されている(卜部・佐々木, 1999)。これらの研究は、自分自身の規範意識のみならず、他者による規範逸脱行動の頻度や、他者が持つ規範意識の影響に着目することの重要性を示している。

また、規範意識に関する変数は、例えば、「○○という行動を、どのように思うか」といった質問に対して「良いと思う」「悪いと思う」などの回答を求めることで測定されることが少なくない (e.g. 出口・吉田, 2005; Stewart, 2003; 卜部・佐々木, 1999)。これに対して、出口 (2018) では、このような方法で測定された規範意識だけではなく、ゲーム理論 (e.g. Axelrod, 1997; 生天目, 2004) や相互依存理論 (e.g. Kelly et al., 2003; Thibaut & Kelley, 1959) を基にした「決定行列」(Deguchi, 2014) を使用し、「自分の周囲にいる他者」に着目しつつ、規範逸脱行動に対する態度を測定している。

ここで用いられている「決定行列」とは、「自分と他者が持つ (行動等に関する) 選択肢の組み合わせで定められる利得 (満足度など) を示したもの」(出口, 2018) である。例えば、自分と他者が、規範を「守る (Obeying)」 「破る (Breaking)」 という 2 つの選択肢 (行動) をそれぞれ持つ場合、互いの利得は「自分:Obeying / 他者:Obeying」(M11), 「自分:Obeying / 他者:Breaking」(M12), 「自分:Breaking / 他者:Obeying」(M21), 「自分:Breaking / 他者:Breaking」(M22) という 2×2 の計 4 種類存在することになる。M12 であれば、『自分は規範を守っている (Obeying) が、周囲は破っている (Braking), という状況』に対する満足度を表す。仮に M11, M12, M21, M22 の値が順に 5, 1, 2, 3 であれば、他者が「Obeying」の場合は自分も「Obeying」を選択した方が満足度は高く (M11 > M21), 他者が「Breaking」の場合は自分も「Breaking」を選択した方が高い (M12 < M22) ことを意味する。すなわち、他者と同じ行動を選択したときに満足度が高くなることを示す。したがって、この決定行列は「同調」に分類される。

このように、「M11 と M21」「M12 と M22」の 2 つの大小関係によって分類された態度は「行動基準」と呼ばれる (e.g. Deguchi, 2014; 出口, 2018)。「行動基準」を用いることによって、「いかなる状況でも規範逸脱行動に対して否定的」(「遵守」の行動基準)、「周囲と同じ行動をとることに対して肯定的」(「同調」の行動基準) といったように、規範逸脱行動に対する態度を質的な側面に着目しつつ把握することが可能となる。そして、「遵守」の行動基準を持つ者は、「逸脱」の行動基準を持つ者よりも、一般的に逸脱頻度が低い傾向も示されており、行動基準の分類方法には、一定の妥当性があることが示唆されている (出口, 2014)。

大学生の行動基準を測定した研究 (出口, 2014) では、「遵守」的な (行動基準を持つ) 者は、「授業に関する私語」については全体の 18% 程度、(授業中の) 「メール」の使用については 27% 程度であったことを報告している。また、中学生の私語について検討した研究 (出口, 2018) においても、「遵守」的な者は全体の 3 分の 1 弱と比較的少数であったことが示されている。このように、「行動基準」を用いて規範逸脱行動に対する態度を質的な側面から検討した研究では、「遵守」という規範逸脱行

動に対して明確に否定的な態度を持つ者は、実は比較的少数である可能性が示唆されている。

しかし、これらの行動基準に関する研究は、いずれも横断的なものであり、行動基準と自分の逸脱頻度間の因果関係については、必ずしも十分な検討がなされていない。前述の「自分の隣に座っている生徒」の影響について検討した研究 (出口, 2018) も横断的な研究であり、かつ、「授業中の私語」のみに焦点が当てられている。このため、「授業中の私語」以外の規範逸脱行動における「周囲にいる他者の影響」についても、縦断的に検討する必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では、教育場面における多様な規範逸脱行動に対する行動基準や他者の規範意識および逸脱頻度が自分の逸脱頻度に及ぼす影響について、縦断的な方法によって検討することを目的とした。また、特に「授業中の私語」については、逸脱頻度が高いほど対人的な適応感が高い傾向があることも示唆されている (出口・吉田, 2005)。このため、本研究においては、「授業中の私語」以外の規範逸脱行動についても、適応感と同様の関係が見られるのか否か、という問題に対しても併せて検討することとした。

## 2. 方法

### 2. 1. 調査対象者

四年制大学における多人数の授業 (履修者数は 350 名以上) 1 クラス (座席指定はなし) の履修者に回答を求めた。調査は 2010 年 10 月下旬と 12 月下旬の 2 回実施した。そして、10 月は 270 名、12 月は 206 名から質問紙を回収した。

### 2. 2. 測定した変数

- (1) 規範逸脱行動に対する態度: 本研究では、A. メール (「授業中に、携帯メールを使用する」), B. 内職 (「授業中に、他の科目の課題等をする」), C. 飲食 (「授業中に、飲食をする」), D. 音楽 (「授業中に、イヤホンで音楽を聴く」), E. 授業と無関係の私語 (「授業中に、授業と無関係の私語をする」), F. 授業に関する私語 (「授業中に、授業に関する私語をする」) の 6 つの規範逸脱行動を測定の対象とした (Cialdini et al., 1990 や出口 (2014), 水野 (2001) 等で扱われている規範逸脱行動を参考にした)。規範逸脱行動を選定する際、複数の学生で行う行動 (「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」) や 1 人で行うことができる行動 (「内職」「飲食」「音楽」) の双方を含むようにした。これらの規範逸脱行動ごとに、「あなたも、周囲の人たちも、していない (M11)」、「あなたはしていないが、周囲の人たちはしている (M12)」、「あなたはしているが、周囲の人たちはしていない (M21)」、

「あなたも、周囲の人たちも、している(M22)」という仮定の4状況を提示し、「1.非常に不満」から「7.とても満足」(各数値を直線状に等間隔で配置した。段階尺度による測定については、以下も同様)で、それぞれ回答を求めた(出口(2014)等と同様)。「周囲の人たち」については、『あなたの席の近くに座って、この授業を受けている人たち(友人以外の人も含みます)』のことでと教示した。なお、仮想場面を提示する前に、「もしも、この授業が以下のような状況になったとしたら、あなたは満足ですか? それとも不満ですか?」という質問文を提示し、調査対象者が今受けている科目について回答するように求めた。

- (2) 自分の規範意識・他者の規範意識(推測):「規範逸脱行動に対する態度」と同じ6つの行動に対して、「5: 良いと思う」から「1: まずいと思う」で回答を求めた(以後、「自分の規範意識」と記す)。さらに、『周囲の人たち』が、上記の行動についてどのように考えていると思うのかについても、5段階評定によって回答を求めた。このように測定された他者の規範意識は、以後、「他者の規範意識(推測)」と記載する。
- (3) 自分の逸脱頻度:「規範意識」で扱った各行動について、「5: たくさんした」から「1: ぜんぜんしなかった」の5段階で回答を求めた。
- (4) 大学への適応感:「学業に対する適応感」「対人関係に対する適応感」の2つの下位尺度からなる尺度(出口・吉田, 2005)を使用し、「5: いつも思う」から「1: ぜんぜん思わない」の5段階評定で回答を求めた。
- (5) 一緒に授業を受けている他者:各質問紙には「質問紙番号」が印刷されており、「いま、あなたの周りに座っている友人」の質問紙番号を記入するように求めた。この際、授業を1人で受けている場合は回答しなくてもかまわない旨、教示した。

### 2. 3. 手続き

調査は10月・12月ともに匿名式で行った。10月と12月のデータは質問紙番号を基にして対応させた。具体的には、各月の質問紙に独自の質問紙番号を配付前に印刷した。そして、12月の質問紙に回答する際、「10月の質問紙に記載されていた質問紙番号」を記入するように求めた(12月の質問紙番号は、12月に「一緒に授業を受けている他者」を回答する際に用いた)。

質問紙はB4用紙に両面印刷したものを扱い、集団で配付・回収した。質問紙の最初には、調査内容の概略を記載した。さらに、回答の内容が授業の成績に影響することはないこと、回答したくない質問があった場合は回答しなくても良いこと、等についても文章によって説明した。これらの教示の後に、質問紙への回答を求めた。

測定は、著者が所属する機関の研究倫理委員会による事前の審査・承認を得てから実施した。

## 3. 結果と考察

### 3. 1. 分析の対象としたデータ

10月の調査については、回収された270名分の質問紙のうち、白紙での提出あるいは質問紙全般に無回答のまま提出したもの(27名)や、回答の信頼性に問題があると思われたもの(例:数値が規則正しく多数並んだもの)などの3名を除外した。その結果、計240名分(男子66名、女子164名、不明10名;平均年齢18.98,  $SD=0.81$ )の回答を分析対象とした。

一方、12月については、回収された206名分の質問紙のうち、10月の回答者との対照が可能な123名分(男子33名、女子89名、不明1名;平均年齢19.12,  $SD=0.79$ )の回答を分析対象とした。

### 3. 2. 指標の算出

本研究においては、独立変数については10月の調査で得られたデータから指標を算出し、従属変数については10月ないし12月の調査で得られたデータ双方を使用した。このため、内的整合性の確認のために $\alpha$ 係数を求める際は、独立変数については10月の調査で得られたデータを使用し、従属変数については10月および12月で得られたデータごとに $\alpha$ 係数を算出した。独立変数に関する各指標の平均値および標準偏差は表1に示した。

- (1) 行動基準:10月の調査への回答を基に、規範逸脱行動に対する4つの態度(M11, M12, M21, M22)ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、順に.86, .81, .83, .82と、高い内的整合性が示された。このため、各項目に対する回答を合計し、項目数で除したものを指標とした。そして、出口(2014, 2018)と同様の方法(注の2参照)で、「M11とM21」および「M12とM22」の2つの大小関係を基に、回答者を「遵守」「逸脱」「同調」「反対」「中立」の行動基準のいずれかに分類した。「反対」については、その割合が非常に低かったため(1%未満)、以後の分析から除外した。
- (2) 自分の規範意識・他者の規範意識(推測)・逸脱頻度:各規範逸脱行動に対する回答を基に $\alpha$ 係数を算出した。その結果、規範意識は.76, .77(10月, 12月の順)、他者の規範意識(推測)は.84, .87、逸脱頻度は.69, .70と、一定の内的整合性が示された。このため、各項目に対する回答を合計し、項目数で除したものを指標とした(表1参照)。なお、「自分の規範意識」と「他者の規範意識(推測)」(および後述の「他者の規範意識(実際)」)については、6から各指標の値を引くことにより、その値が高いほど規範逸脱行動に対して「否定的

である」(規範意識が高い)ことを意味するように変換した。自分の規範意識と他者の規範意識(推測)の平均値の差を、対応のある *t* 検定によって検討したところ、「授業に関する私語」を除く全ての指標(「全体」も含む)において、「他者の規範意識」の方が低い傾向が示された( $p < .01$ )。これは、中学生を対象とした出口(2018)の研究等における結果を支持するものであった。

- (3) 他者の規範意識(実際)・他者の逸脱頻度:「一緒に授業を受けている他者」の回答欄に最初に記入された人(回答欄の一番左上に記載された人)が回答した「(自分の)規範意識」を「他者の規範意識(実際)」の指標、「(自分の)逸脱頻度」を「他者の逸脱頻度」の指標とした。自分と他者のデータの対照作業は、Microsoft ExcelのVisual Basic for Applicationsによって作成したマクロを用いて行った。
- (4) 大学への適応感:下位尺度ごとに、 $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「学業に対する適応感」は.60, .73(10月・12月の順)、「対人関係に対する適応感」は.80, .84と、一定の内的妥当性が示された。このため、下位尺度ごとに各項目に対する回答を合計し、項目数で除したものを指標とした。

### 3. 3. 自分および他者の規範意識・他者の逸脱頻度と自分の逸脱頻度の関連

「自分の規範意識」「他者の規範意識(推測)」「他者の規範意識」「他者の逸脱頻度」という4種類の規範意識に関する指標を独立変数、「自分の逸脱頻度」を従属変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った(表2)。規範逸脱行動の種類によって、独立変数と従属変数の関連が異なる可能性が考えられたことから、各規範逸脱行動に関する項目を合計した指標を用いた分析だけでなく、規範逸脱行動ごとの分析も実施した。

その結果、「自分の規範意識」については、全般的に有意な負の関連が示された。10月と12月の「音楽」については、*R*自乗が有意では無かった( $p > .10$ )。次に、「他者の規範意識(実際)」には、10月と10月の「メール」「授

業に関する私語」のみに有意ないし有意傾向ではあるが関連が見られた。ただし、「メール」については、「他者の規範意識(実際)が高いと、自分の逸脱頻度が高い」という正の方向での関連であった。一方、「他者の規範意識(推測)」については、10月と10月の「授業に関する私語」のみに有意な負の関連が示された。最後に、「他者の逸脱頻度」については、10月と10月の逸脱行動全体の指標や、「メール」「内職」「授業と無関係の私語」において、有意な正の関連が見られた。ただし、「内職」については、*R*自乗は有意傾向であった( $p < .10$ )。さらに、10月と12月の「メール」においても、有意傾向ではあるが正の関連が示された。なお、「1人で授業を受けている学生」については、「他者の規範意識(実際)」「他者の逸脱頻度」の指標は存在しない(欠損値扱いとなる)ため、これらの指標についての分析を行う際の *N*は低下する。本研究においては、投入した全ての変数に欠損値のないデータのみを用いて重回帰分析を行ったことから、特に10月と12月については *N*が小さくなった(70~71)。このため、他の独立変数に関する指標における欠損値の影響を受けない相関分析も行い、付録の表Aにその結果を示した。

分析結果をまとめると、まず、「自分の規範意識」と「自分の逸脱頻度」の間には全般的に有意な負の関連が見られ、自分の規範意識が自分自身の逸脱頻度を規定している可能性が示された。一方、「他者の規範意識(実際)」については、顕著な影響を及ぼしている傾向は見られなかった。これは、松本(2010)の研究結果を支持するものであった。また、「他者の逸脱頻度」については、他者の規範意識(実際)に比べると、比較的多くの関連が示された。そして、「他者の規範意識(推測)」については、10月の「授業に関する私語」を除いて、有意な関連は示されなかった。「実際」の他者の規範意識を、どの程度正確に「推測」できているのかについて検討するため、「他者の規範意識(推測)」と「他者の規範意識(実際)」の相関係数を算出したところ、規範逸脱行動全体の指標および規範逸脱行動ごとの指標のいずれにおいても、絶対値.20以上の有意な相関は示されなかった。すなわち、他者の規範意識を精確には推測できていない可能性が示

表1 独立変数に関する指標の平均値および標準偏差(10月の調査によるデータ)

		全体		メール		内職		飲食		音楽		私語1 <sup>a)</sup>		私語2 <sup>a)</sup>	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
規範意識	自分の規範意識	3.59	0.65	3.41	1.04	3.22	0.96	4.08	1.05	4.20	0.97	4.23	0.86	2.39	0.92
	他者の規範意識(実際)	3.47	0.62	3.28	1.00	3.17	0.94	4.01	0.98	4.01	1.06	4.11	0.81	2.25	0.90
	他者の規範意識(推測)	3.11	0.79	2.91	1.05	2.77	1.04	3.59	1.08	3.67	1.09	3.50	1.17	2.28	0.90
	他者の逸脱頻度	2.20	0.47	2.78	0.93	1.96	0.98	1.54	0.91	1.07	0.32	2.75	0.92	3.09	0.89
決定行列 (態度)	M11	5.47	1.12	5.55	1.31	5.41	1.29	5.60	1.52	5.62	1.48	5.69	1.63	4.95	1.52
	M12	3.78	0.82	3.49	1.28	3.84	1.22	2.75	1.43	2.92	1.51	2.34	1.35	3.99	1.42
	M21	3.87	0.84	3.62	1.23	3.89	1.23	2.96	1.41	3.04	1.44	2.88	1.38	4.05	1.41
	M22	4.08	0.89	3.87	1.30	4.11	1.29	3.13	1.55	3.07	1.50	3.13	1.51	4.68	1.41

<sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語

表2 自分の逸脱頻度と各独立変数との重回帰分析結果(時期別)

		逸脱頻度						
		全体	メール	内職	飲食	音楽	私語1 <sup>a)</sup>	私語2 <sup>a)</sup>
10月と10月	自分の規範意識	-.47 **	-.42 **	-.15	-.40 **	-.28 **	-.40 **	-.39 **
	他者の規範意識 (実際)	-.07	.18 *	.07	-.06	.12	.02	-.16 †
	他者の規範意識 (推測)	.12	.07	-.06	-.02	.09	.00	-.18 **
	他者の逸脱頻度	.22 **	.23 *	.20 *	.04	.00	.30 **	.05
	R自乗	.28 **	.20 **	.06 †	.19 **	.08 †	.28 **	.30 **
10月と12月	自分の規範意識	-.48 **	-.38 **	-.23	-.30 **	-.06	-.51 **	-.42 **
	他者の規範意識 (実際)	-.15	.13	.11	-.02	.07	-.13	-.08
	他者の規範意識 (推測)	.12	-.10	-.04	-.18	.14	.11	-.17
	他者の逸脱頻度	.16	.23 †	.10	.08	.18	.16	-.16
	R自乗	.24 **	.19 **	.06	.11 †	.04	.32 **	.27 **

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  †  $p < .10$  <sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語  
note: N は, 10月と10月は134~137, 10月と12月は70~71。

表3 自分の逸脱頻度と各独立変数との重回帰分析結果(12月と12月)

		逸脱頻度						
		全体	メール	内職	飲食	音楽	私語1 <sup>a)</sup>	私語2 <sup>a)</sup>
12月と12月	自分の規範意識	.50 **	.51 **	.35 *	.56 **	.17	.67 **	.51 **
	他者の規範意識 (実際)	.07	-.07	-.21	.00	-.04	.00	-.07
	他者の規範意識 (推測)	-.16	.01	.00	.03	.04	.28 *	-.12
	他者の逸脱頻度	.16	.29 *	.03	.16	.34 *	-.12	.20
	R自乗	.25 **	.30 **	.09	.34 **	.15 †	.48 **	.25 **

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  †  $p < .10$  <sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語  
note: N は61~62。

唆された。これは、出口 (2018) と同様であった (なお、本研究においては、「他者の規範意識 (実際)」は「友人」の規範意識を測定し、一方の「他者の規範意識 (推測)」は「友人でない者も含む他者」の規範意識を測定しており、後者の範囲の方が広い点については留意が必要である)。これらの結果から、「他者の規範意識→他者の逸脱頻度→自分の逸脱頻度」という過程で、「他者の規範意識 (実際)」は、間接的に自分の逸脱頻度に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

ただし、10月の「他者の逸脱頻度」と12月の「自分の逸脱頻度」の間には、10月の「他者の逸脱頻度」と10月の「自分の逸脱頻度」との間ほどの関連は示されず (表2参照)、時期が進むにつれて他者の影響は弱まってくる可能性も示唆された。このため、12月に測定した各独立変数と、同じく12月に測定した「自分の逸脱頻度」との関連について、重回帰分析 (強制投入法) によって検討した (表3)。その結果、「メール」「音楽」において、有意な正の関連が示された (ただし、「音楽」のR自乗は有意傾向)。すなわち、独立変数と従属変数の測定時期を一致させると、12月であっても両者には一定の関係性が見られる可能性が示唆された。このことから、時間が経過するにつれて「『他者の逸脱頻度』の影響が弱まった」と結論づけることは、本研究による知見のみでは難しいと考えられる。本研究は座席指定を行っていない授業の履修者を測定の対象としたことから、10月と12月では異なった人物が「いま、あなたの周りに座って

いる友人」として回答された可能性もある。このため、今後は、座席指定をしている授業で測定を行うなどして、より詳細な検討を行っていくことが重要となる。

また、「メール」については、「他者の規範意識 (実際)」が高いと、自分の逸脱頻度も高くなる」という正の関連が示された。しかし、「他者の規範意識 (実際)」と「自分の逸脱頻度」の相関係数を算出すると、有意にはならなかった ( $r = -.02$ 。付録の表A参照)。このような分析結果は、中学生を対象に「授業中の私語」について検討した研究 (出口, 2018) でも示されている。この研究では、「他者の私語頻度」(本研究における「他者の逸脱頻度」に対応) の影響を (重回帰分析をすることで) 統制した場合にのみに正の関連が示されたことに注目し、以下のように考察されている。まず、周囲の他者が高い規範意識を有しているにもかかわらず私語 (規範逸脱行動) をすることで、その行為が許容される程度 (どのくらいの頻度までであれば、規範逸脱行動をしても許容されるのか) を、「自分」は高く認識する。その結果、「自分」は、その行為を行うことが容易になる (その行動を行う頻度が増加する) のではないか、というものである。すなわち、他者が「してはいけない」と考えている (高い規範意識を持っている) にも関わらずその行動をしているのであるから、「してもよい」と考えて行動をしている場合よりも、その場における「その行為が許容される程度」は高く認知されるのではないか、という考え方である。本研究は大学生を対象としたものであるが、重回帰分析

では両者に正の関連が見られたものの、相関分析においては関連が示されなかったという点は共通しており、これと同様の現象が生じた可能性がある。

なお、「授業に関する私語」は、本研究で扱った6種類の規範逸脱行動のうち、「他者の規範意識（推測）」の負の関連が見られた唯一の行動であった。ただし、この行動については、規範意識に関する全ての指標（「自分の規範意識」「他者の規範意識（実際）」「他者の規範意識（推測）」）において3.00未満の値が示された（表1参照）。このため、この行為については、大学生には「規範逸脱行動」であるとは必ずしも捉えられていない可能性がある点には留意が必要であろう。この「授業に関する私語」だけ、「自分の規範意識」と「他者の規範意識（推測）」の間に有意な差が示されなかったことも、これが一因となっていると考えられる。

### 3. 4. 行動基準と自分の逸脱頻度の関連

行動基準（4水準）を独立変数とした対応のない分散分析を行った（表4）。その結果、10月の行動基準と10月の自分の逸脱頻度には、規範逸脱行動全体の指標を含む全てにおいて、有意な主効果が示された（ $ps < .01$ ）。10

月と12月にも、「飲食」「音楽」以外の全てにおいて主効果が見られた（「全体」の指標と「内職」は $ps < .05$ 、他は $ps < .01$ ）。多重比較（TukeyのHSD法）の結果、一般的に、「逸脱」「同調」「中立」よりも「遵守」の逸脱頻度が低い傾向が示された。また、「同調」の逸脱頻度は、「授業に関する私語」を除いて、「遵守」と「逸脱」の間であった。

これらのことから、自分の行動基準は、自分自身の逸脱頻度に対して安定した影響力を及ぼしていると考えられる。ただし、多重比較の結果、「逸脱」と「遵守」の間の差が有意ではなかったものもあり（特に10月と12月）、行動基準が逸脱頻度に及ぼす影響については、さらなる検討が必要となろう。

### 3. 5. 自分および他者の逸脱頻度と大学への適応感の関連

相関分析を実施した（表5）。以下、絶対値で.20以上の有意あるいは有意傾向の相関係数が見られたものについて論じる。まず、自分の逸脱頻度と「学業に対する適応感」については、10月と10月、10月と12月の順に、 $rs = -.26, -.40$ （ $ps < .01$ ）の有意な負の相関が示された。

表4 行動基準と逸脱頻度の分散分析結果(時期別)

		全体		メール		内職		飲食		音楽		私語1 <sup>a)</sup>		私語2 <sup>a)</sup>									
		M	SD	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD	n							
10月	遵守	1.86	0.51	70	2.35	0.98	91	1.73	0.93	88	1.27	0.62	112	1.04	0.30	123	1.87	0.99	84	2.35	1.06	48	
	逸脱	2.56	0.63	11	3.46	1.05	13	2.80	1.15	15	1.79	0.98	14	1.50	1.07	8	3.17	1.27	12	3.19	0.81	53	
	同調	2.01	0.54	120	2.90	0.98	70	1.82	1.01	49	1.41	0.66	54	1.07	0.26	44	2.35	0.96	89	2.25	1.12	48	
	中立	2.33	0.74	25	3.07	0.90	57	2.18	1.11	77	1.76	1.06	50	1.33	0.86	55	2.67	1.23	43	2.52	1.16	81	
10月	F	7.81 **		10.15 **		6.38 **		5.78 **		5.36 **		9.45 **		8.18 **									
	偏 $\eta^2$	.10		.12		.08		.07		.07		.11		.10									
多重比較 <sup>b)</sup>		1 < 4, 2; 3 < 2, 4		1 < 3, 4, 2		1 < 4, 2; 3 < 2		1 < 4		1 < 4		1 < 3, 4, 2		3, 1, 4 < 2									
10月と12月	遵守	1.75	0.48	34	2.33	1.02	52	1.80	0.81	50	1.19	0.44	57	1.06	0.24	66	1.73	1.01	45	2.34	1.21	32	
	逸脱	2.38	0.55	4	3.17	0.75	6	3.14	0.69	7	1.71	0.76	7	1.00	0.00	2	2.83	1.47	6	3.30	0.99	27	
	同調	2.04	0.58	70	2.81	0.94	42	2.14	1.01	28	1.40	0.81	35	1.07	0.37	30	2.25	0.89	57	2.26	0.93	31	
	中立	2.13	0.57	9	2.83	1.15	18	2.27	1.07	33	1.42	0.77	19	1.20	0.62	20	2.60	1.17	10	2.50	0.97	30	
12月	F	3.28 *		2.83 *		5.05 **		1.95		0.84		4.38 **		5.92 **									
	偏 $\eta^2$	.08		.07		.12		.05		.02		.10		.13									
多重比較 <sup>b)</sup>		全てn.s.		全てn.s.		1 < 2						全てn.s.		3, 1, 4 < 2									

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  <sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語 <sup>b)</sup> 有意水準5%による検定結果

表5 自分・他者の逸脱頻度と適応感の相関係数(時期別)

			逸脱頻度						
			全体	メール	内職	飲食	音楽	私語1 <sup>a)</sup>	私語2 <sup>a)</sup>
学業に関する 適応感	10月と10月	自分の逸脱頻度	-.26 **	-.24 **	-.12 †	-.15 *	-.11 †	-.29 **	-.09
		他者の逸脱頻度	-.14	-.04	-.07	-.12	-.13	-.14	-.02
	10月と12月	自分の逸脱頻度	-.40 **	-.26 **	-.21 *	-.21 *	-.07	-.43 **	-.18 *
		他者の逸脱頻度	-.22 †	-.20	-.18	-.19	-.11	-.16	.05
対人関係に 関する適応感	10月と10月	自分の逸脱頻度	.35 **	.23 **	.06	.14 *	.06	.34 **	.39 **
		他者の逸脱頻度	.08	.14	.10	.03	-.10	.06	-.06
	10月と12月	自分の逸脱頻度	.37 **	.27 **	.05	.12	-.04	.37 **	.40 **
		他者の逸脱頻度	.12	.08	.08	.03	.12	.13	.04

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  †  $p < .10$  <sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語

規範逸脱行動ごとの分析については、10月と10月においては、「メール」「授業と無関係の私語」に負の相関が見られた。10月と12月においては、「音楽」「授業に関する私語」以外の全ての規範逸脱行動に負の相関が示された。一方、自分の逸脱頻度と「対人関係に対する適応感」については、10月と10月、10月と12月の順に、 $r_s = .35, .37$  ( $p < .01$ )の有意な正の相関が見られた。規範逸脱行動ごとの分析については、10月と10月、10月と12月ともに、「メール」「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」に正の相関が示された。

このように、「学業に対する適応感」には負、「対人関係に対する適応感」には正の相関が示された。これは、出口・吉田(2005)の結果を支持するものであった。

次に、他者の逸脱頻度と「学業に対する適応感」については、10月と12月のみに、 $r = -.22$  ( $p < .10$ )の弱い負の相関が示された。このことから、他者が規範逸脱行動を行うことの(学業に対する)否定的な影響は直ちに発生するのではなく、徐々に生じていく傾向があると考えられる(注の5も参照されたい)。規範逸脱行動ごとの分析については、いずれの時期においても、有意あるいは有意傾向の相関係数は見られなかった。一方、他者の逸脱頻度と「対人関係に対する適応感」については、顕著な相関は一切示されなかった。

### 3. 6. 今後の課題

近年の研究においては、授業中の私語や内職などの「対学校的問題行動」については、(個人レベルではなく)「学校レベルの規範文化」が規定因となっている可能性も報告されている(金子, 2011)。これに関連して、「遵守」的な(行動基準を持つ)者は全体の3分の1弱しかいないにもかかわらず、学級全体における規範逸脱行動(私語)の頻度を規定している可能性を示唆した研究もある(出口, 2018)。今後は、このような集団レベルにおける規範に関する変数と逸脱頻度の関係にも着目しつつ、規範逸脱行動について検討していくことが重要となる。また、規範意識や行動基準の規定因についても、授業運営の仕方(北折・太田, 2011)などに焦点を当てつつ、検討していく必要がある。

### 謝辞

調査にご協力いただきました皆さまに、深く感謝いたします。また、本研究は、文部科学省科研費(若手研究 B, 22730508)、および JSPS 科研費(JP26380885)の援助を受けました。

### 注

1) 本研究の一部は、2012年の日本社会心理学会第53回大会において発表された(「教室での規範逸脱行動

と適応感の関連: 縦断的データによる検討)。本論文は、上記学会における発表で用いられたデータを再分析し、加筆・修正したものである。

- 2) 遵守:  $M11 > M21$  かつ  $M12 > M22$ , 逸脱:  $M11 < M21$  かつ  $M12 < M22$ , 同調:  $M11 > M21$  かつ  $M12 < M22$ , 反対:  $M11 < M21$  かつ  $M12 > M22$ , 中立:  $M11 = M21$  かつ  $M12 = M22$ 。「M11とM21」「M12とM22」の大小関係のいずれか1つのみに「=」を含む場合は、もう一方の大小関係を基に、「遵守」か「逸脱」のいずれかに分類(e.g. 出口, 2014, 2018)。
- 3) 行動基準と規範意識の関連について検討するため、出口(印刷中)と同様に、「M11からM21を引いた値」「M12からM22を引いた値」と規範意識の相関係数をそれぞれ算出した。その結果、「M11からM21を引いた値」については、規範逸脱行動全体の指標および規範逸脱行動ごとの指標全てにおいて.35から.51の有意な正の相関が示された。一方、「M12からM22を引いた値」については、いずれの指標においても絶対値.20以上の有意ないし有意傾向の相関は見られなかった。これらの結果は、出口(2018)と同様であった。このことから、規範意識が「周囲の他者が規範逸脱行動を取っていない場合における態度」に関するものであり、「(周囲の他者が)規範逸脱行動を取っている場合における態度」については必ずしも反映されていない可能性を指摘した同研究での考察は、本研究の対象である大学生においても支持されうると考えられる。
- 4) 「他者の逸脱頻度」(表1)と「自分の逸脱頻度」(表4)の平均値を比較すると、「授業と無関係の私語」および「授業に関する私語」においては、「他者の逸脱頻度」の方が比較的高い値となっている。これは、「他者の逸脱頻度」の指標は「他者(友人)」と一緒に授業を受けていた者のみがあるものであり、1人で授業を受けていた者、すなわち、「一緒に私語をする者が近くにおらず、逸脱頻度が低かった者」は、指標の算出の際に含まれなかったことによるものと考えられる。
- 5) 本研究では、「一緒に授業を受けている他者」の回答欄に最初に記入された者を「他者」として分析した。「自分が選択した者」が必ずしも自分を最初に選択しているとは限らない。そこで、(本文中に記載した「『他者の』逸脱頻度」と「『自分の』学業に対する適応感」だけでなく)「自分の逸脱頻度」と「他者の学業に対する適応感」との相関係数も併せて算出した。その結果、10月と10月の間には絶対値.20以上の有意ないし有意傾向の相関は見られなかった。一方、10月と12月には、規範逸脱行動全体の指標に $-.35$  ( $p < .01$ )の相関が示されたほか、「メール」に $-.42$  ( $p < .01$ )、「授業と無関係の私語」に $-.31$  ( $p < .05$ )

の相関が見られた。このことから、「自分の逸脱頻度」が「他者の学業に対する適応感」に及ぼす影響も、直ちにではなく、徐々に生じてくるものであると考えられる。なお、「(他者の) 対人関係に関する適応感」については、いずれの時期においても、絶対値.20以上の有意ないし有意傾向の相関は示されなかった。

#### 引用文献

- 安藤きよみ・中島 望・鄭 英祚・中嶋和夫 (2013). 小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究 川崎医療福祉学会誌, **22**, 148-157.
- Axelrod, R. (1997). *The Complexity of Cooperation*. Princeton University Press. (アクセルロッド, R. 寺野隆雄(監訳)(2003). 対立と協調の科学: エージェント・ベース・モデルによる複雑系の解明 ダイアモンド社)
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- 出口拓彦 (2009). 規範意識と社会的迷惑: 授業中の私語 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 (編著) 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版. pp. 135-148.
- Deguchi, T. (2014). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*, **32**, 439-452.
- 出口拓彦 (2014). 規範逸脱行動に対する行動基準と態度 教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 81-88.
- 出口拓彦 (2018). 教室における私語の頻度と規範意識・行動基準の関連: 個人レベルおよび集団レベルの影響に着目して 実験社会心理学研究, **57**, 93-104.
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- Demanet, J., Vanderwegen, P., Vermeersch, H., & Van Houtte, M. (2013). Unravelling gender composition effects on rule-breaking at school: a focus on study attitudes. *Gender and Education*, **25**, 466-485.
- Durmuscelebi, M., (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education*, **130**, 377-383.
- 金子泰之 (2011). 中学校の規範文化と生徒の規範意識が中学生の問題行動に及ぼす影響 犯罪心理学研究, **49**, 29-37.
- 加藤弘通・太田正義 (2016). 学級の荒れと規範意識および他者の規範意識の認知の関係: 規範意識の醸成から規範意識をめぐるコミュニケーションへ 教育心理学研究, **64**, 147-155.
- Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 北折充隆・太田伸幸 (2011). 講義中の私語抑制対策に関する効果測定: 座席指定とTAによる見回り実施に対するFD評価項目の比較検討 東海心理学研究, **5**, 8-14.
- 松本将孝 (2010). 授業中の私語に関する研究: 大学生と中学生の私語の相違の検討 関西学院大学 2009年度社会学研究演習II卒業論文(未公開)
- 水野邦夫 (2001). 親の養育態度が大学生の授業規範意識に及ぼす影響について 聖泉論叢, **9**, 21-31.
- 生天目 章 (2004). 相互作用科学シリーズ ゲーム理論と進化ダイナミクス: 人間関係に潜む複雑系 森北出版
- Özben, Ş. (2010). Teachers' strategies to cope with student misbehavior. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, **2**, 587-594.
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- 澤田和美・戸塚智美・鈴木 恵・椎野雅代 (2013). 看護短期大学1年次生の授業中の私語の頻度と規範意識の変化と関連要因: 入学後と1年次後期授業終了後との比較 第43回(平成24年度)日本看護学会論文集 看護管理, **43**, 63-66.
- Solomon, D., & Kendall, A. J. (1975). Teacher's perceptions of and reactions to misbehavior in traditional and open classroom. *Journal of Educational Psychology*, **67**, 528-530.
- Stewart, E. A. (2003). School social bonds, school climate, and school misbehavior: A multilevel analysis. *Justice Quarterly*, **20**, 575-604.
- 鈴木 恵・戸塚智美・澤田和美・椎野雅代 (2015). 看護学生の私語の頻度と規範意識・社会的スキル・属性との関連: 看護短期大学2年次後期終了後の検討 応用心理学研究, **41**, 56-64.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H., H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.
- 卜部敬康・佐々木 薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究: リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.



【付録】

表A 自分の逸脱頻度と諸変数との相関分析結果(時期別)

	規範意識	N	逸脱頻度						
			全体	メール	内職	飲食	音楽	私語1 <sup>a)</sup>	私語2 <sup>a)</sup>
10月と10月	自分の規範意識	236~240	-.52 **	-.45 **	-.26 **	-.43 **	-.29 **	-.51 **	-.47 **
	他者の規範意識 (実際)	137~138	-.11	-.02	-.07	-.03	.13	-.19 *	-.22 *
	他者の規範意識 (推測)	228~233	-.16 *	-.06	-.05	-.30 **	-.17 *	-.13 †	-.35 **
	他者の逸脱頻度	137~138	.32 **	.24 **	.22 *	.04	-.04	.39 **	.22 **
10月と12月	自分の規範意識	122~123	-.40 **	-.35 **	-.23 **	-.23 **	-.13	-.47 **	-.47 **
	他者の規範意識 (実際)	71	-.07	-.16	.01	-.14	.10	-.01	-.19
	他者の規範意識 (推測)	117~119	-.04	-.03	-.03	-.16 †	-.08	-.07	-.33 **
	他者の逸脱頻度	71	.22 †	.27 *	.14	.11	.13	.21 †	-.01

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  †  $p < .10$  <sup>a)</sup> 私語1: 授業と無関係の私語, 私語2: 授業に関する私語